



【立って我々を待ってておられるイエス・キリスト】

聖書本文：使徒の働き7章54-60節・暗唱聖句：ヨハネの黙示録6章11節

説教者：鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん! 一週間の間も元気で、主の平安で守られたでしょうか?

みなさんは地上で主の教会が始まって以来、キリストの福音を宣べ伝えながら殉教された初めての殉教者はだれかご存知ですか? そうです。ステパノ執事です。ステパノ執事の殉教の出来事は初代教会だけではなく、今日も聖書に詳しく記されている大切な内容です。今日はそのステパノ執事の殉教を通してくださる神様からの教訓を考え、学んで行きたいと思います。

イエスを信じるということで石に打たれ死んだ人を見たことは我々の中にはほとんどいないと思います。‘イエスを信じる’という理由で火に焼かれる残酷な光景を見たこともないと思います。我々はイエスを賛美しながら動物に裂かれ殉教される場面を目撃したこともなく、我々自身もそのような危険に置かれたこともないと思います。だからこそ、ステパノ執事の殉教の話は我々が読むのにもある意味負担になると思います。このメッセージを準備する私自身もとっても戸惑いました。私こそこの御言葉の前で資格がないと思ったからです。‘ステパノのまねをするふりでもいいのに。よく食べ、楽に休み、歩くのがめんどくさいから車に乗って行っている私がキリストの福音のために石打にされ死んでいくステパノ執事の殉教の話をおそれ多く講壇で語れるのか?’という思いもありました。

このようなステパノ執事の殉教に関するメッセージはもっと謙虚な姿勢で、悔い改める姿勢で、恵を追い求める気持ちで受け止めるべきだと思います。実はステパノ執事の殉教の事件以来、キリスト教2000年の歴史の間、数え切れないほど多くの殉教者の尊い血が流されました。今もこの地球には老若男女(ろうじゃくだんじょ)問わず、ただ‘イエスを信じる’という理由で迫害と殉教までされる場合が少なくありません。決してイエスキリストを信じるクリスチャンの人たちはだれかに害を与えたり、悪い事をした事は決してありません。かえってキリストの愛を持って仕え、助けたりするだけでした。昔もそうですが、今日イスラムのテロリストたちのように暴力で戦いながら血を流す事を尊い殉教だと言われ、今もその残酷に命を投げ捨てていますが、クリスチャンの殉教はただイエスキリストを信じていると、キリストを信じる信仰をただ守っているための理由で殉教されたわけです。

彼らはイエス様のために自分の命を死の前で要求される時、ためらわず、命を投げています。しかし、それを見ている周りの人々は“なぜもっと賢くできなかったのか?あるいはもうちょっと賢く答えれば危機からは免れるのに。なぜそこまで。。。。”と殉教者の気持ちを理解することができません。これで今日の殉教という事についてクリスチャンたちでさえ避ける事になってしまいました。

この世が楽になればなるほど、環境が良ければ良いほど、殉教というのは昔話に出てくるある出来事のように聞こえるかもしれません。しかし、我々が覚えるべきことは、キリスト教は‘血の信仰’ということです。イエス・キリストは十字架で血を流し、罪赦しと救いの扉を開けて下さいました。そして、この救いのイエスキリストの福音と愛を伝えながら多くのクリスチャンたちも血を流しました。そのような犠牲と献身がなかったなら、決してこんにち福音が私たちにまで伝わらなかったかもしれません。血を流す事をためらわなかったその勇気のため、命を惜しまずに投げ捨てるそ殉教の信仰があったため、全世界にキリストの愛と福音が伝えられ、今日私たちにまで届いて信じる事ができたのではないのでしょうか。そして、今もキリストの福音が全世界に伝えられているのではないのでしょうか?

殉教者たちに対して神様はたしかに黙示録で使徒ヨハネに啓示されました。ステパノの殉教の血だけで終わるのではなく、この地上にキリストを信じる信仰があるかぎり、血を流しながら殉教することは絶えない事を仰せられました。ですから、いまでもその殉教の血は流れています。そしてこれからもそうするでしょう。こんにちには日本は信仰の自由があり、迫害や殉教はほぼなくなりましたが、過去日本にも多くの殉教の血が流されました。イエスキリストの御名のため殉教の道を歩んだその殉教者たちはみんな神の御国に入っているとされています。

黙示録6章9-10節をみてください。“小羊が第五の封印を解いた時、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」”

御国で神様の祭壇の下には‘神様の御言葉’と‘自分たちが立てたキリストのあかし’のために殺された人々のたましいがいます。彼らは信仰を守るために殺され殉教されたたましいです。きっとステパノ執事も彼らの中にいる

でしょう。そして、そのたましいは祭壇の前で“聖なる、真実な主よ。私が地上で流した血をいつ報いて下さるのですか。さばいてください。”といまもなお叫んでいきます。パウロの血、ペテロの血、ヤコブの血、その他多くの殉教者たちの血が2000年も過ぎたいままで主の祭壇の前で叫ばれているでしょう。彼らのたましいはいまも主の祭壇の前で祈られています。いつまで彼らの祈りは続き、殉教の血が流されるのでしょうか？

“すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言

い渡された。”(黙示録6:11)

白い衣はイエス・キリストの義を象徴します。イエス様が彼らに与えられたもう二度は死なない永遠の義の命を象徴します。白い衣が与えられて‘しばらくの間、休んでいなさい。’と言われました。残念ながら神様は‘もうしばらくの間’と言われます。我々人間には何千年ですが、神様は‘もうしばらくの間’だと言われます。いつまででしょうか？

‘あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数(殉教者の人数)が満ちるまで’です。神様が定められた殉教者の数があります。その数はどのぐれいなのか分かりません。これから殉教の血をどれほど受け取られるか分かりません。しかし、殉教者の数が満ちるまではキリストを信じる者たちは血を流し続けることになるでしょう。

<復活の証人として死ぬ覚悟の信仰で生きましょう。>

実際、殉教者の栄光は誰もにあたえられることではありません。神様から特別に恵みが与えられた人のみ可能なことです。ですから、我々はこの殉教者の列には入れないとしても、今日ステパノの殉教をみながら、死ぬ覚悟で信仰を守り抜くことを学ばされます。まことのクリスチャンは殉教の覚悟で生きる者である事をも学ぶことが出来ます。

実際に、殉教者と証人はギリシャ語の原語で‘マルトウス’で同じ単語です。ですからイエス様の復活の証人となるということは殉教者になるというのと同じ意味です。イエス様が我々の救い主であり、よみがえっていまも生きておられるという事をあかしすることは命をかける霊的戦いでもあります。イエスを信じなさいと勧めることは大したことのないように感じられるかもしれませんが、目に見えてない霊的世界では大した戦いです。サタンはそれを聞きたがりません。むしろ嫌っています。信じていない人々にはイエスが生きている神の御子であり、その方を信じれば永遠の命を得、信じないと永遠の地獄を迎えると伝道する時、それはその人をかけてサタンと伝道する私の間での霊的戦いが始まる事を意味します。みなさんは、イエスが生きておられる神であり、我々の救い主であることをあかししていますか？

それはたしかに霊的な命を得ることでもあるので、命をかけて証しするのと違いありません。死ぬ覚悟で、イエス・キリストを信じ、そのイエスキリストが生きておられる事を証しする者のためにイエス様は彼らを大事にされ、特別に天の神様の右の座に立っておられ迎えると言われています。

<神の御座に立って待っておられるイエス様>

55節でステパノ執事が天を見上げた時、よみがえられたイエス様が御座から立っておられました。古代神学者だったアウグスティヌスはこの箇所についてこのように解釈しました。“イエス様が天の神の右に座っておられると言われるときは裁き主を意味し、立っておられると言われるときは弁護者であり我々のとりなし者を意味する”神様の御座に立ってステパノを待っておられるイエス様を見ながら、ステパノ執事はどんなに慰められたのでしょうか？

イエス様は福音のために命をささげるステパノを座ったまま迎えることができなかったのか、立って両手をあげてステパノ執事を迎える準備をされていました。イエスキリストの最初の殉教者となるステパノ執事を迎えたイエス様が立っておられたのであれば、最後の数になる殉教者が御国に入るその瞬間さえもイエス様は立って彼らを迎えてくださるでしょう。

愛する信仰の家族のみなさん！この世から見れば、イエス・キリストの福音を伝えながら、殉教された人々があまりにも悲惨で、むなしい人生を過ごしたかのように思われるかもしれませんが、御国ではこんなにすばらしい栄光が待っています。これがまさに殉教者が受ける栄光です。

この世ではステパノのように石打ちにされ、ペテロのように十字架に逆様になって無惨(むざん)に死んだり、パウロのように首を切られ死ぬ場合もありますが、その瞬間が過ぎればすぐさま我々の主ご自身が直接天の御座からたって両手を開いて出迎えてくださる栄光に入れたと思います。その次に御国で永遠に迎える安息と栄光を一度想像して見ましょう。我々にもこのように希望と望みがあるのでしょうか。

“主よ。この世ではイエスを信じるということできずまされたり、貧しかったり、ある時はあまりにも惨めな人生

を送るかもしれませんが、これらのことが過ぎ去った後、主の御前に立つ瞬間から天の栄光が私を囲んで、主の両手が私を抱いてくださるなら、主のために受けるこの世での苦難を喜んで選び取ります。”
我々は石打たれ死ぬほどの危機ではなくても、イエス様の証人として拒まれたり、ののしられたり、時には苦難を受ける時もありますが、天の御座におられる主をみあげ、永遠の天国への望みを抱いて生きるクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますようにお祈りします。

<ステパノ執事の代わりにサウロをその座に>

愛する信仰の家族のみなさん！ステパノ執事が殺された理由とともに最後に考えたいことは、ステパノ執事を殺した人は誰だったのか考えて見ましょう。それは後主のしもべとして大いに用いられた使徒パウロでした。イエス様を信じる前のサウロとサウロにへつらう人たちが実はステパノ執事を殺した者たちでありました。サウロがそれを仕切っていました。サウロはまだ若い青年でした。イスラエル人のイスラエル人であり、アブラハムの子孫だと言いながら、高慢だった人であり、律法学者であるガマリエルのもとで律法の教育を受けた人で、ユダヤ教のためなら何でもするという頑固（がんこ）な人でした。

まるで神様はユダヤ教のエリートであるサウロとキリスト教のエリートであるステパノ執事を入れ替えたのです。私たちの思いだと執事ステパノを用いるのが神様にはもっと栄光であり、ステパノのようなすばらしい人が働いて当然なはずなのに、なぜか神様はステパノを連れて行かれ、その代わりにステパノを殺したサウロを立たせたのです。そしてくすしい御業をなさいました。なぜそうされたのでしょうか？

殉教者の血は決して無駄になりません。殉教者の血は音を出さず流れてもかならず、実を結びます。殉教者の血は結局神様の御心をなすとげます。ですから、ステパノ執事の死は決して無駄ではありません。ステパノ執事はサウロをうませるために死んだのです。真の救いの道を知らず、かたくなな同じ民族の一人の青年を救うため、そして自分が犠牲を払うことにより後になっては自分よりももっと偉大な福音伝道者なる一人を残して代わりに死んだのです。

ですから、愛する信仰の兄弟姉妹のみなさん！私たちが一生忘れてはいけない事は自分がイエスキリストを信じる事ができたのは自分がよく選択したり、賢かったからではなく、だれかが私が信じる事ができるように大きな犠牲を払い、献身をされたゆえに自分が救われた事を忘れないで下さい。我が愛する民族が、愛する人々が、周りが救われるためにもだれかが死ぬほどの犠牲と献身を捧げなければならない事ももう一度心に刻んで生きたいと思いません。

愛する信仰の家族のみなさん！使徒の働きを記録した人はサウロの主治医（しゅじい）だった医師であったルカでした。ルカはサウロ（高い者意味）がイエス様を信じてパウロ（低い者）の名前に変え伝道者になった後、パウロに伝道され、一生パウロの宣教とともに働いた弟子でした。ステパノ執事が石に打たれ死ぬ最後の場面、最後までイエス・キリストを証したその感動的で印象的な場面をルカはだれに聞いて記録したのでしょうか。直接使徒パウロから、自分がサウロだった頃からステパノ執事の殉教を最初から最後まで目撃し、それを一瞬も忘れることなく生きてきたようです。イエス様に出会って福音伝道者になったパウロは“私は罪人のかしらである”とよく言った事だけでもステパノを殺した罪人であることが彼の胸に刻まれていたと思います。

後に、パウロ自身もイエス・キリストの福音を伝えながら牢屋に入れられたり、死ぬほどむち打たれたり、飢えと死の危険にさらされながらも最後まで喜んで耐えたのにはステパノの分までという強い負い目があったかも知れません。我々はステパノ執事のような信仰の殉教者にはならないとしてもその信仰と精神だけは受け継がなければなりません。どこに行っても人を恐れなくて、イエス様の復活の証人として生きましょう。

毎日死ぬ覚悟で生きる殉教の精神と信仰が必要です。いまが平安だと安心してはいけません。もう一度、自分たちの信仰生活を振り返ってみましょう。いまも聖霊は我々を放っておきません。聖霊は艱難の時も平安の時も、ご自分の子供たちを守ってくださいました。

今日ステパノ執事のように聖霊に満ち、生きるのも主のために、死ぬのも主のために死ぬ殉教の信仰を最後まで守り、いつか天の御座から立って我々を迎え入れてくださる主に出会う祝福されたクリスチャンプレイズチャーチの信仰のみなさんとなりますよう切にお祈り申しあげます。アーメン！